

---

《研究報告》

『トータルデザイン研究』の記録(2)\*  
—地域連携授業による実践的活動の効果—

---

Record of "Total Design Research" (2)  
— The Effect of the Practical Activity by Regional Alliance Lesson —

---

草野圭一\*\*  
KUSANO Keiichi

---

はじめに

本レポートは、『トータルデザイン研究の記録(1)—地域連携授業による実践的活動の効果—』(名古屋学芸大学短期大学部研究紀要第9号2012年3月)の続編である。地域連携授業として2011年度より取り入れた科目「トータルデザイン研究」は、2年目を迎えた。1年目は、授業実施のための運営や体制づくり、取り組み方法、企画提案を中心としたが、2年目に入り、新1、2年生への引き継ぎ、連携先とのさまざまな調整、次のステップへ進むためのいくつかの課題も少しずつ見えてきた。

地域連携は、今や大学に求められる役割の1つと言ってもよい。インターネットで「地域連携」をキーワードに検索すると、上位のほとんどが各大学の地域連携活動のページが結果で表示される。国は、内閣総理大臣を本部長に「都市再生本部」を平成13年に設置し、都市再生プロジェクトの第10次決定事項として、「大学と地域の連携協働による都市再生の推進」を平成17年に決定している。大学のキャンパスなどは都市を構成する重要な要素の1つであり、大学をまちづくりの重要なパートナーとして位置づけている。<sup>1)</sup> これらからも、地域連携の必要性は十分感じられる。

大学として、組織立てて地域連携に取り組むのも一つの形である。各大学では、地域連携を大々的に繰り返しているところも多々ある。ここでは、授業として取り組み、何を、どんな方法で、どこまでできたのか。より現場に近い視点で、活動を進める側から、学生側の視点と連携先の多角的視点で述べていきたいと思う。

本稿では、2011年度から2012年度に実施した実践活動の成果を報告するとともに、地域連携を継続していくためにはどうしたらよいかを考察する。

## 1. 2011～2012年度実践活動

### —事例と試み—

#### (A) 日進市立図書館との連携

##### 〈活動内容〉

日進市立図書館との連携活動は、2011年度に引き続き、学生作品の展示「デザインモデル作品展」を、小学生を対象に親子で参加するワークショップ「飛び出すプレゼントカード制作」を実施した。

---

\* 2012年9月14日受理

\*\* 名古屋学芸大学短期大学部

#### ◇デザインモデル作品展

日時：2012年8月18日（土）～26日（日）

場所：日進市立図書館ロビー

#### ◇ワークショップ 飛び出すプレゼントカード制作

日時：2012年8月25日（土） 13時～15時

場所：日進市立図書館工作室

参加者：5組11名

#### 〈結果報告〉

昨年度は、初めてで図書館側も教員側も何をどこまで準備すればよいか手探りのところがあったが、今年度は2回目とあって、より計画立てて行うことができた。

作品展にあたっては、1年生はデッサン、エッチングの作品を、2年生はポスターやショップのロゴデザイン、キッチンツール、手ぬぐいといった専門分野の授業作品を展示した。作品の展示を予定していた授業において、事前に展示する旨を担当教員へ伝え、授業内で展示用に作品をまとめてもらうことができた。作品が実際に展示されるとなると、学生も多少気合いの入りが違う。搬入出を行った学生は、展示のための道具や器具、方法を知り、作品の並べ方、高さや間隔の位置など、どうバランスを取ると見やすいか、学生同士作業を分担し、協力し合って完成させていく大切さなど、現場で感じ取ったことと思う。

ワークショップにあたっては、昨年は小学生がどの程度のレベルかが半信半疑であったが、今年度はそのレベルに合わせつつも、ある程度の幅をもって要望に応えられるだけの準備をすることができた。学生が、制作するプレゼントカードの基本形を考え、見本を作成した。対象者である小学生が何を求めているか、どこまで作業ができそうかなど、相手のことを考慮しながら、どうすれば作り方がわかりやすく伝わるか、どう接すれば上手くいくかなどを検討しながら準備を進めた。これは、業務を行う上でオーナーの要望に対する受け方、接し方にも通じるものであり、実践において肌で感じてもらうことができた。当日学生は、参加者に付き添い、制作の手助けを行った。まず参加者が何を作りたいのかを聞き出し、それを読み取る理解力が求められる。次に、どう形にすると面白くなるか、発想力である。そして作り方を考える具現化する力、総合的なコミュニケーション力が必要となる。ワークショップに参加した学生は、これらの過程を実践において養ったことと思う。この場だけの出会いではあるが、会話したり共に手を動かし時間や空間を共有することで感じる人との縁、一緒に試行錯誤しながら作り上げる達成感など、教室内ではなかなか体感することができない感動を得たことであろう。参加者、学生双方がそう感じてもらうことに、ワークショップの意義がある。

#### 〈記録写真〉



展示搬入作業の様子



展示開催時の様子



ワークショップ全体の様子



制作の様子



ワークショップでのコミュニケーション



ワークショップ参加者作品（一部）

## (B) 障害者支援多機能型事業所あゆみ館との連携

### 〈活動内容〉

岐阜県御嵩町にある障害者支援多機能型事業所あゆみ館で栽培、販売している、しいたけの販売促進のためのロゴとキャラクターを制作した。さらに、パッケージ用のシールとしてレイアウトし、実際にシールとなって使用されている。

### ◇ロゴ・キャラクターのシール化までの過程

2011年5月7日（土）あゆみ館にて現地調査と打ち合わせ

2011年8月31日（水）あゆみ館にて制作した案のプレゼンテーション

2011年9月～11月 修正とシール化へデータ制作、入稿

2011年12月下旬 シール完成

2012年2月3日（土）あゆみ館へこれまでの活動のお礼と今後の打ち合わせ

### 〈結果報告〉

あゆみ館との連携も、引き続きである。2011年の8月に、キャラクター案のプレゼンテーションを行った際、提案した2案とも採用したいとのことで、実際の販売時に使用する袋に貼るシール制作へと進んだ。ただし、2点の修正があった。修正箇所と修正案を以下にあげる。

1. キャラクターの頭（しいたけのかさ）部分にA・Y・U・M・Iとアルファベットのワンポイントを入れていたが、もっとわかりやすく親しみやすいもので、ワンポイントを入れてほしい。  
→アルファベットは止め、キャラクターのアイテムとして台所用品を身につけさせた。キャラクターに動きが出て、食卓に登場するイメージも沸いた。
2. 子供のキャラクターの表情が固い。

→口元を修正した。女の子は笑顔で唇を強調させ、男の子は舌を出してやんちゃな表情にした。  
それぞれの個性を出すことができた。

以上の修正をし、館長の了解を得て、シールの制作へと進んだ。

シールは、販売する際に使用している袋の表面に貼れるよう制作をする。商品は生しいたけと干しいたけの2種類。サイズは生しいたけ用が横70mm×縦42mm。干しいたけ用が横35mm×縦42mm。そのサイズの中に、商品ロゴ、キャラクター、キャッチコピー、製造・販売元をレイアウトし、いくつかの案を提出した。その中から、生しいたけ用が2パターン、干しいたけ用が1パターン採用となり、シールの印刷へと進んだ。印刷業者へこちらからデータを送り、完成に至った。

館長との打ち合わせから始まり、現地調査、制作、プレゼンテーション、修正、確認、入稿、完成と、この流れは実践そのものである。実践における活動の、最も重要で勉強になることは、オーナーが存在すること。デザインとは独りよがりではなく、誰かのために制作することが大前提にある。オーナーが納得しなければ、いくら素晴らしいものを制作しても成立しない。ではオーナーの言うことを聞けばよいのかというと、これもまた違う。説得しお互い納得するためのプレゼンテーションを必要とする。その後細かい点の修正、確認作業もある。これらオーナーとの繰り返しの作業が大切で、良い結果を生み、お互いの信頼をも生む。実際のところ、大学のある日進市とあゆみ館のある御嵩町とでは、物理的に綿密な打ち合わせができない難点があった。それでも、初回の打ち合わせ、制作物のプレゼンテーションと、最低限館長と直接会って話し合いを行った。最終段階の修正、確認は、メールに画像を添付しながら行った。完成に至り、あゆみ館からは、参加した学生へ完成したシールを送っていただいた。学生達は、いただいたシールを手し、感動も一入であったことと思う。完成してから1ヶ月ほど経ってからではあるが、これまでの感謝と今後について、あゆみ館を訪れた。館長は笑顔で迎えていただき、学生達は達成感による自信が、顔に表れていたように感じた。

現在、シールは販売に使用されている。今後はさらにキャラクターを生かした、販売促進ツールへの展開を試みたい。しかし、新しいことをやるには、資金が必要となる。あゆみ館は企業ではないので、収益を上げることが目的ではない。何かを始めようとする際の資金は、自治体の補助金や事業の予算申請に通らなければならない現状がある。できる範囲でできること。それは決してあきらめや妥協ではなく、制約の中でこそ、デザインを生かすことができると私は信じている。あゆみ館との連携を今後も続け、学生達にもこのような現状を理解してもらいたい。そして、だからこそデザインが必要だと、感じてもらいたい。

〈制作物〉 ※全て学生作品



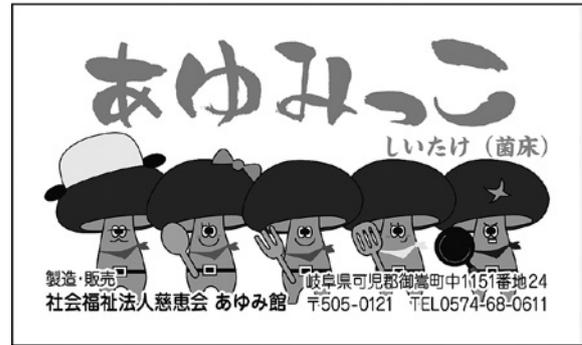
しいたけキャラクター（あゆみっこ家族）



しいたけキャラクター（あゆみレンジャー）



干しいたけ用シール



生しいたけ用シール

〈記録写真〉



しいたけ栽培見学の様子



打ち合わせの様子



プレゼンテーションの様子



完成したシール



しいたけの販売の様子



館長と学生達の集合写真

## (C) 岐阜県御嵩町役場との連携

### 〈活動内容〉

岐阜県可児郡にある御嵩町役場とは、まちづくり課と連携を取って活動を進めている。2011年度は御嵩町の観光資源である「ささゆり」と「中山道」の、観光 PR ポスターを制作した。2012年度は、まちづくり課が主催するイベント「宿の市」に参加し、「缶バッチ作り」を実施した。

#### ◇観光 PR ポスターの制作

ささゆり PR ポスター：2011年5月～6月 名古屋市栄中日ビル、御嵩町各施設にて展示

中山道 PR ポスター：2011年10月～継続的に使用 御嵩町各施設にて展示

#### ◇宿の市

日時：2012年6月3日（日） 9時～12時

場所：岐阜県可児郡御嵩町 名鉄御嵩駅前さんさん広場

### 〈結果報告〉

岐阜県御嵩町まちづくり課との連携は、デザインを通してまちづくりに何ができ、どう貢献できるかを試みている。御嵩町へは2010年度から現地へ足を運び、役場の方の話を聞いたり、中山道を歩き、古刹を見たりして、まず知ることから始めた。その時は「トータルデザイン研究」の科目は無かったので、サークルとして活動を行っていた。そして2011年度、役場より観光に来てもらうための告知としてポスターが必要だが、内部の者での制作では物足りない。そこで、デザインを学ぶ学生に、ポスターを制作してもらえないかと依頼を受けた。ささゆり PR ポスターは、画像を役場から提供していただき、中山道 PR ポスターは、学生達が現地で撮影した画像を中心に使用した。キャッチコピーやレイアウトの作業を進めるにあたり、何度か現地へ行っており御嵩町のイメージを十分持っていたので、役場の求めるイメージはつかめることができた。

6月に開花のピークを迎える「ささゆり」PR ポスターの制作意図は、御嵩町には中山道があり、ウォーキングが盛んな場所であること。名鉄広見線の存続も重要な鍵で、電車に乗って来て、まちを歩くことをテーマにポスターを考えた。3案制作し3案とも採用され、2011年5月に開催された中日ビル（名古屋市中区栄）での御嵩町観光 PR 展に使用され、まちの施設にも掲示された。

秋のウォーキングに向けた「中山道」PR ポスターの制作意図は、御嵩町には伏見宿と御嶽宿の二つの宿場と、史跡や古刹など名所があること。ウォーキングは観光の目玉となっているので、中山道の趣ある街道のイメージをテーマにポスターを考えた。こちらも3案制作し3案とも採用され、11月に開催された役場主催のウォーキング大会での掲示、年間を通してまちの施設にも掲示された。ポスターの成果がどれだけ観光につながったかはわかりかねるが、役場の方からは、これまでにない御嵩町のアピールができたとの評価をいただいた。

ポスターの制作は、役場にとっては不得意なところで、デザインを学ぶ学生にとっては得意なところになる。私達としては何かを制作して御嵩町のまちづくりに貢献する実績が欲しいところに、役場が作業を提供してくれた。このように、双方の弱点や要求を補い活動することは、連携活動の一つの形である。そこにたどり着くまで、お互いに何ができるかを模索し、幾度と連絡し合い、継続して御嵩町との関係をつないだ結果である。

2012年度は、御嵩町役場が主催するイベント「宿の市」に、ブースを準備してもらい参加した。御嵩町では、先の障害者施設あゆみ館とも連携を行っているので、あゆみ館のしいたけキャラクターを生かし、何か作ることをやろうと考えた。イベント時の客は、じっくり時間をかけてするわけではなく、どちらかと言うと短時間でいくつものことを見て回りたい気持ちがあると思う。短時間でキャラクターを生かして作れるもの。キャラクターに塗り絵をして缶バッチを作ることにした。キャラクターを線画にして用紙にプリントアウトしておく。お客にマーカーや色鉛筆で色を

塗ってもらい、カットして缶バッジを作った。学生は、接客と制作の手助けを行った。

まちのイベントに参加すると、現地の役場の人や住民と直接交流することができる。机上だけではわからない、土地の雰囲気、風や匂い、空気感といったものを肌で感じる事が大切である。まちづくりは、とても範囲が広く規模が大きい。都市計画となればプロジェクトチームを組織し、様々な専門家や有識者が集まり、資金も必要となってくるだろう。規模は違っても、見失っていけないのは、実際にまちを作っていくのは住民一人一人であること。地に足をつけ、現場で声を聞くことが何にも勝る資料である。イベントの参加は、まちづくりを体感する重要な第一歩である。

〈制作物〉 ※全て学生作品



ささゆり PR ポスター



中山道 PR ポスター



〈記録写真〉



宿の市全体の様子



宿の市でのポスター掲示の様子



作業の様子



制作の様子



地域の子供とのコミュニケーション



現地での集合写真

## 2. 地域連携活動を継続していくためには

### (1) 問題点

「トータルデザイン研究」は2年目を迎え、いくつかの問題点が浮き彫りとなってきた。初年度は取り組み体制や活動方法、連携先との信頼関係を築いていくことに力を注いできたが、いざ、活動を進めていくと、その先々で新たに気づくことがある。これまでの活動を通して感じたことを以下にあげる。

- ・一つの成果を出した後、次への展開をどう進めていくか。
- ・より活動を深め、成果を具現化していくためには、資金が必要となる場合もある。

- ・学生間の引き継ぎや、連携先の担当者が交代した時に、温度差が生じる。
- ・新たな連携先をどうするか。

これらは継続していくための問題点と言える。これらの解決策こそが、連携活動を継続させる鍵になると考える。資金面においては、本稿における主旨とは異なるので、ここでは深く考察しないが、現実的には最重要課題と言える。温度差については、先輩から後輩へ、活動が引き継がれていくことがこの科目の特色であるが、事務的に、受動的な姿勢では、その思いまでは引き継がれない。活動に対する積極的な姿勢が求められる。また、連携先の担当者が交代した場合でも、私達の姿勢として積極的なコミュニケーションを図ることであり、惰性に流されないようにしていくべきである。新たな連携先について、気にはなったが、現時点での活動を着実に進めていくことが優先と考える。「次への展開」について、事例にあげた3つの連携活動を通して考察していく。

## (2) 次への展開

日進市立図書館との連携のように、作品展示とワークショップは、恒例行事として実施されるようになると継続へとつながる。ただし、マンネリ化しては意味が無くなる。作品展示は、出展者である学生が代わるので、作品も毎年違うものが展示できる。レベルを下げずに、来場者にとっても興味溢れる作品制作が求められるであろう。ワークショップは、年1回だけではなく、季節に合わせたものや違う対象で行ったりすることも考えられる。しかし、昨年度開催した後、図書館側と「年末のクリスマス時期にも実施できるとよいですね。」と交わしたのだが、12月は卒業制作の追い込み時期で、教員も学生もその余裕が全く無く、昨年同様夏休み時期の開催に至った経緯があるので、実施時期の調整はとても難しい。同じ活動を繰り返す場合は、質を最低限でも維持しなくてはならず、新たな企画による変化も必要とする。

障害者支援多機能型事業所あゆみ館との連携においては、キャラクターの制作、袋に貼るシールの制作と、内容を展開してきている。館長の要望は、しいたけを御嵩町のオリジナルブランドとして広く発信し、施設利用者が日々充実した生活を過ごすことを、最終目的にしている。そのためのキャラクターであり、シールである。次への展開としては、パッケージ、キャラクターグッズやキャラクターを生かしたリーフレットなど販売促進ツール、さらに広く発信するためのポスターやホームページ、キャンペーンも考えられる。一般的に企業であれば、何をやるのか明確にし、そのための予算を出し、何ができるか、どれだけの成果をあげられるかを計画する。しかし、あゆみ館のような施設では、そこまで手は回らないのが現状である。次への展開は考えられるが、全てができる訳ではなく、極限られた中でできることを一つ一つ進めていくしかない。現実を把握した上で、打開策を見出していくのも連携活動の役割である。

御嵩町役場との連携は、イベント事での活動が主となる。まちづくり課が実施するイベントがあれば、継続は可能であるが、遠距離であることも含め、役場の行事日程と大学の行事日程の調整が非常に難しい。イベントとなれば、特に現場が欠かせなくなる。現在のところ、役場からの話を受けて、大学、学生の調整がいたら動くといった状況にならざるを得ない。御嵩町との連携は、デザインを通してまちの活性化へ貢献していくことを目的にしている。宿の市では、企画課の方とも話すことができた。御嵩町役場や地元住民とのつながり方、御嵩町で何をすべきなのかをもう一度見直し、整理する必要があるだろう。

継続していくということは、同じことを続けるのではなく、次への展開を進めていくことである。その時、その場で、何を求めているのかは、変化していく。時代遅れでいてはならず、常に一歩先を見据えて活動を進めていきたい。昨年度より今年度を、今年度より来年度と、年々進化していけるとよい。2011年度はどちらかという、教員側がある程度の段取りをした上で活動してきたが、2012年度は教員側が勝手がわかってきたこともあり、学生へ準備の段階から指導することがで

きた。継続することは、前例を生かすことができ、より良いものへとつなぐ効果が得られる。

### 3. まとめ

地域連携授業による実践的活動を進めてきて、どのような効果があったのか。まだ2年目でははっきりと表れてこず、いくつかの問題点が表れてきたことが、効果の表れであろう。次へのステップとしては、これらの問題点をどう解決へ導いていくかである。解決策も、活動を通して見えてくるものとする。実践での活動は、授業の課題と違い、融通の効かない点が多々ある。例えば現地へ行くにしても先方との日程調整から始まる。そこで一つ、調整することの難しさを知る。現場で作業をする際に、忘れ物をしてはならない。取りに戻る訳には行かないので、事前の準備と確認が不可欠である。このような当たり前のことが大切なのである。頭でわかっている、忘れてしまうことはよくある話だが、身体で覚えたことは、そうは忘れないと言われる。現場へ行くこと、実践で活動するということは、身体で覚え、体感することである。

私達の活動は、まだまだ小さなものであるが、大切なのは継続すること。単発では何も結果が見えず、何も生まない。一過性で終わらず、継続することで問題が発生し、そして話し合い、解決してはまた問題が発生し、その繰り返しの中で生まれる団結力と信頼関係こそが、地域に活力を生み、地域連携の意味があると感じる。私達ができること、それはデザイン力を持って地域と連携し貢献していくことである。

### 引用・参考文献

- 1) 都市再生本部ホームページ